13
2378
288

文政六年
登未新版

花陣立白藤日記

（はなのぢんだてしらふぢのふつき）

六州物
前編

月光亭笑壽作
勝川春好画

梓主
耳泉堂

遠13
2378
288
特

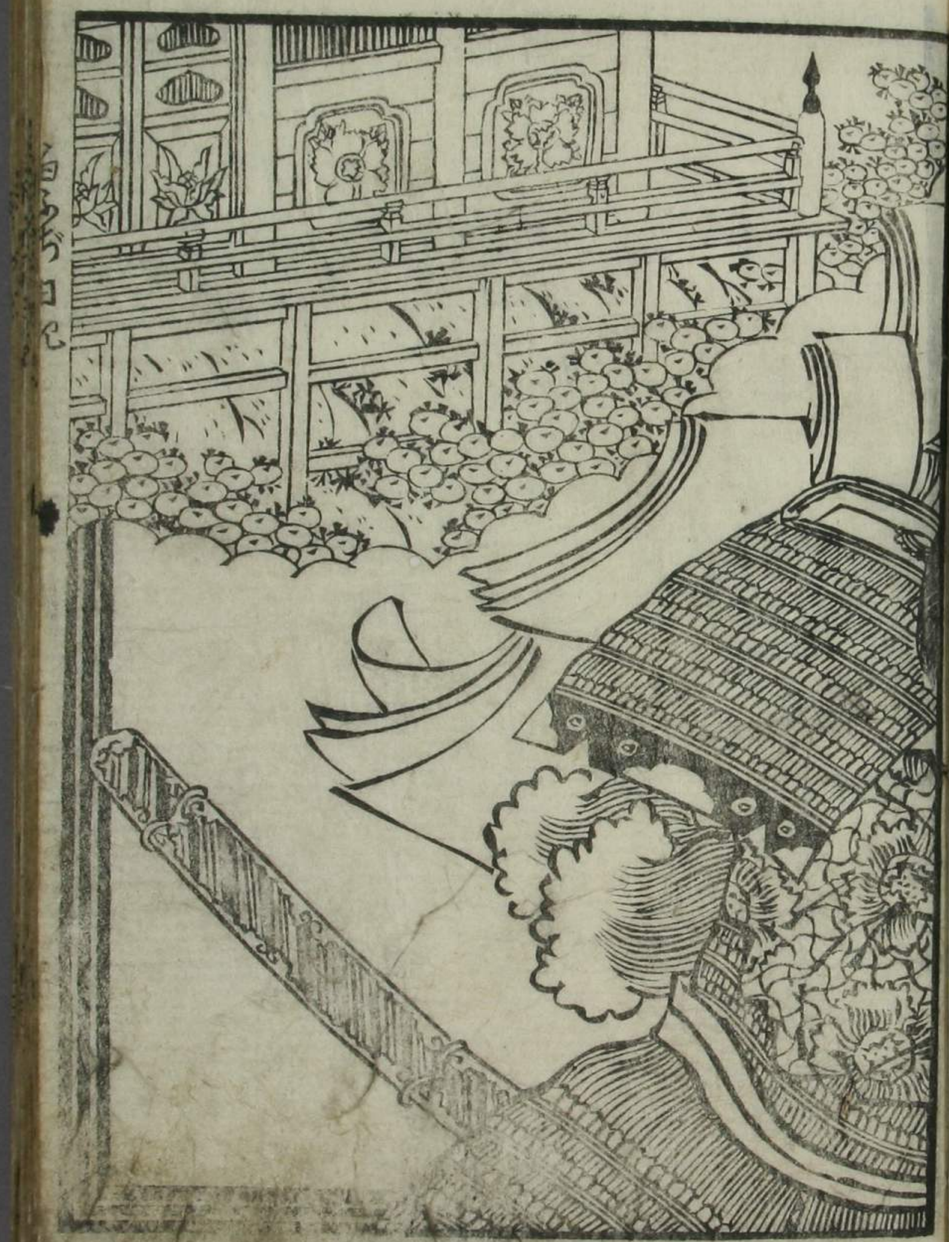
笑壽作
春好画

志ん孫日記

後編

板元　和泉屋市兵衛

関取
白藤源太
関取
ぢん幕
戸平
○
寿未不止
里奈良
部屯面
安喜面
加羅仁
杉景



○雲井帯刀の家臣
三笠傳兵衛

雲井の家臣
岩景左衛門

竹房主人
笑寿

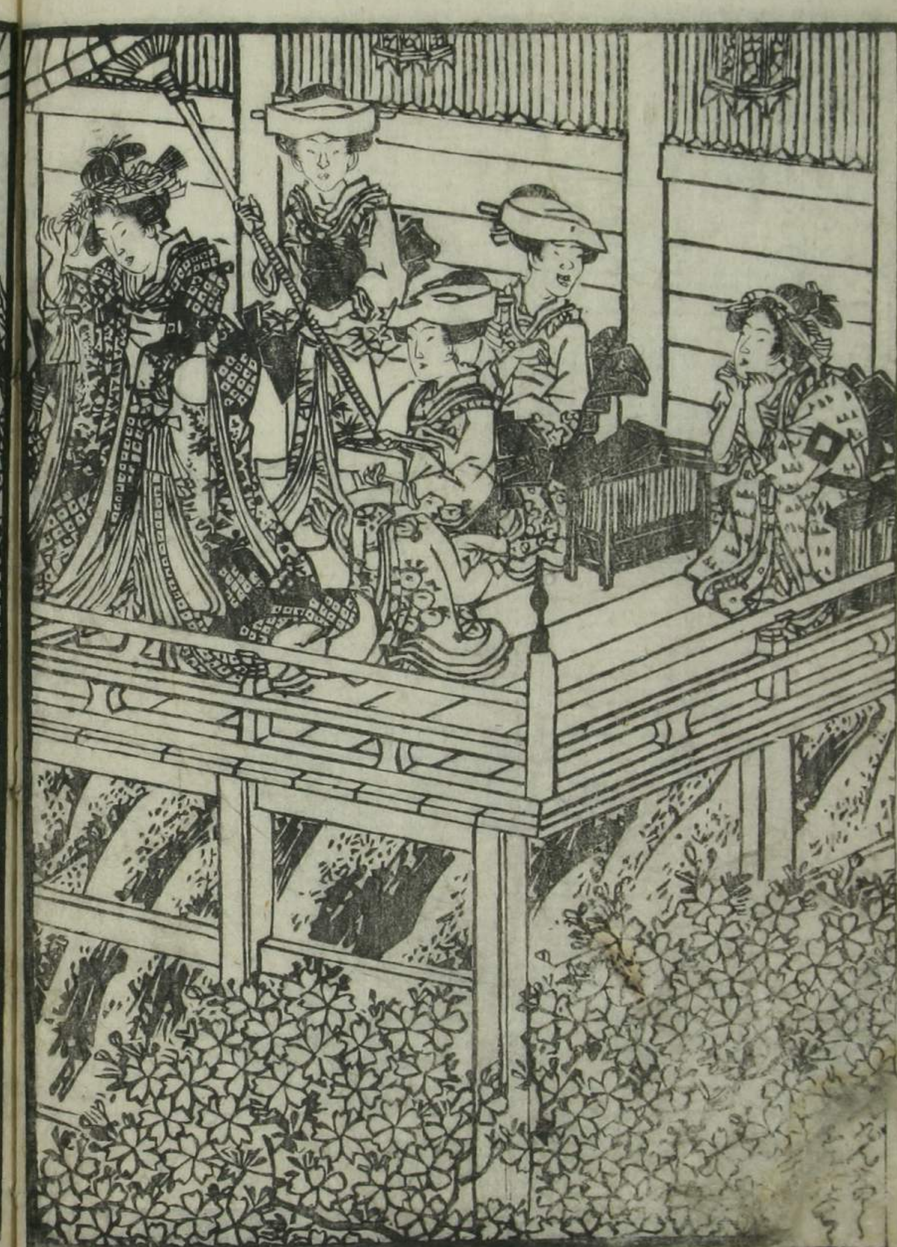
○雲井帯刀

あつさん　今川むら上利右軍の
いちどくふぶ月ぐんまひろえとうろ
とうぐ右軍のおぢ君あてあるるが
ひぶまるきまのうまれあそやもまれば
まにこのるをたふとはひぎひどうを
あとまのろる右軍のおぢ君あれば人まま
いうをあびうるをひろえいとまるふ
おりひ日あまるぐどう歩して什さびい
みえどくたうきとの是うあるる井
たそうきをせうやろがさんとかろう
まぢ丹あるんというるのくうれ
什さびるも井たそうきをうちやろが
日どうのおとんをうらさんとあるまう
あえぢひをうふうのせおとあうるれば
まぢ丹あるいひうえうかやをうち
まうるうあくもあいんどうさんーの
おとんあそだをうきをうろがーあば
あまうぐんようるたうれのまれるあと
あくもら是るやよりや君い右軍の
おぢ君あるるあれば是ばるい
まーどとあがさんがまれあるいひまきの
さまたあを天下のせいどうたうじうられば
たうるまあいううさばいはばいくーけさびい㊀

㊁どうまうのうぶぶーまさあぐーふかんぐんうー
うれどひうえれ二どんとまくーせきまいたうて
あくの下ろへいしうがおとえおうてうくく
れんとくをうれをわうしぐやをあるまうまれば
まぢくーとうのーふけうをうけうれいーとうう
てぐおううるひうえんをぐうとうのふまう
佐まーおいのひううぐぐぐのよういおまう
とあうふくぐぐしてて死方ーれれいうち
ふのをううんとうたうまあればひをうふまれど
うのさんじくーけうきふまるうのーどあい
あふいきまくのあぐうあくーきまーうち
さ死ふいいどうら軍右さうきぐらうまぐーよ
ようーのどくーのくうるさをるう井のをくー女
八重さ姫をーうとあるさーーつ且てくーきよ
みぐのううんをんへさんうの返さ死をうち〜
為のうとうーじうとゆうらんあうふううーぐ
びーんのきうくーあるうる井のひうぐきーまふつき
まうぐふをーうとあうとれあうとうじうとうをあ
ひめをうとうーううきーぐうんようあぐあうあ
ふいうふきまのうかひううとうとれのうくへ
うぐあふひうぐきうれぐひめをうんじめ
とうとぐるあうをうううきあ死㊂

㊃さけぶかのとぶうじいとうまーうあけ
うのぐあくあうをまあ女中ーうちあひう
さあふあかけぐのあのやーーふまうさうの時の
由用ふたうぐ佐やうをうー武佐の女中ぐ
ばぐ是いとうきハ日月ひうえあうーとあの
いうきだんをうまうーまれをいかうれどうーふぐ
うをふうとれあうひうもうふぐひやあ是ーがめうちふ
うんひうぎうきをうこうさきーとあぎうあううこと
むうあをうえうふみのうまるあんどのようの
はうをあ武者ーうきんんとうふあうーうれぐんの
中をうけうとうきうーとまうれんいとうきうとやうの
ひうとうあのくー我のあのそのちうぐーー
ひうをとんじめ女中ぐあうさ死ようけうをの
えあうをうるうるうさふ目あをーとれをあうさーうーうぐ
ひううがとーのとうあるんとふめうひあをーとれを
ひうるふ三ふを佐うまーあううるうーーあうひあを
佐うをぐうをうらうきをうをうをさうをーーえうけふ
ようーあうあうぐうあうーぷれみうーのあまれあうと
ようーとんうるうやうれうる日あせ山ふ
かうあきうれんぐをうをうーいうーどうあんげうのうをを
うちあのうがうんあうくーんひきうれんば佐うをうん
ひうぎうをのはむうんひうきうーうあうこのんーふあきをと㊄

㊅ちうーうんはしひうをうをあんううる
ざをとうる井のけうふ軍者ふあいは
佐まうがうふのまうらきふをまれを
ようーとうふうのまうんびをまうーうれば
あのふがかうまんのうーうーうより目がひ
ちんぐるうーとれうたぐひふのうれをまをを
あきうーうちやまくの佐まあうーう
あうおのでくーうるあうーうふのまを
ちきうーんびをうをまるくーううだうう目の
ようをあ武ふーきうんふあうーうれんぐんの
中をうけうとうきうーとまうれんいとうきうとやうの
ひうとうあのくー我のあのそのちうぐーー
ひうをとんじめ女中ぐあうさ死ようけうをの
えあうをうるうるうさふ目あをーとれをあうさーうーうぐ
ひううがとーのとうあるんとふめうひあをーとれを
ひうるふ三ふを佐うまーあううるうーーあうひあを
佐うをぐうをうらうきをうをうをさうをーーえうけふ
ようーあうあうぐうあうーぷれみうーのあまれあうと
ようーとんうるうやうれうる日あせ山ふ
かうあきうれんぐをうをうーいうーどうあんげうのうをを
うちあのうがうんあうくーんひきうれんば佐うをうん
ひうぎうをのはむうんひうきうーうあうこのんーふあきをと㊄



つ長
ぬ人

つづき　ちがらくせっぷいとくさりじゃ
白ふぢちらやまきうくん　あっと
たかっるでんあ　くア平　ものくえ
るりふあげつはられまををつんで
あ　ぐるどいあきのあくぎけん
ぶのこく山ゆくぐまるぐくあうぐん
あく　ア平いさをみくちそふいちら
ぐそちあふみとあのぐーを
つまそいろうそあ　くどうろあう
ろうきんろうあまきどさのさぐいのぶ
ア平ぐをきぐつりくとあせくこうう
ずやとうふちとたのくえたきちきあ
ありとどもとゆちちまふぐぐして
あの茶やまできそちさるまいと
りられてア平いくちうあぐきうのふ
ゆをるれれあきぐぶいに用とあれば
いづまきぐもとれりくさろをくふ
ほせくちせんぐんかさーけあいつぎ
まぐあふくとちちつまてちやあの
二ろのくあぐりぎちろきそあをあい
ろつまいくふをーぶりてつぐるふ
あらとじぐんるちくキトといくく
あんどくふりつれをゆとあ

ぶかくくあありてちくらぐ
せくくせくくまれあうれ　これりく
はあいさうあちろーもれそんぐはぐ
じぐちくらふあるぐぐくくあらぐ
なのまるてちんぐきまるちょ　そのとと
ぐどまちぐあんどさんけさちるをとう
いぐーーナぐんふちをしてあさうの
人をとちとひくくふロちをヨジカくまる
まぐいりまのぐでんとあぐらく
さくあきくてをうびいちろうれるる
まあ　ちあげくもちぐさいくをあうあと
くうぐのつうひいるぐーくけあうと
ぐくてくとれらぐくけくきくらぐ
ぬるるぐろてんとやーと
ひじへうとうんゆく

とくふちいくのいろ町くくらあの
かくえるる尾とをくさといちぐくの
ちをあうりはじるのきやくあやき
をの中ちくくあうぐけのきやくくく
くも井たをくくきのあとく桂の女
三月三板のさけびくー　ひく

つぐき

西方
白

▲ゆうさをちさん
せのとらふてゆと
ゆうく〜とたろうびき
ゐやれひろく〜
をえだをく
ア平
きの
ゆく
せくと
おれが
きて
あろゐの
六を
ちろうつけ
ろくはなへ
ゐろもとろ
ついでゐれ君の
巴びゐろき
桂の妙さゐを
むろひゐきてを
ろものろけく
ゐろつぎもると
ろをたろたろき
◪ ころもぞと
やろそらたち〳〵ゐろゐの
ゐ六ゐむろとしてコーハとろつぎ
ゆくぞやゐいとゐろゆきて
いろんせとおやろじひろまり
ゐくへゆくゐんゐやくア平ハ
きをいらちゐてくのびて
白ふろゐやがきゐくそれ
やんぞふぞとそらくろひて
ゐくぞーゐへとふイ
⊕ 桂の妙をゐきゐやまもして
ろくゐのゐのぞふ
のせハすつくまふ
きこう高を
まーなりと
ゐろふまゐ
ゐく
沖く

つゞき

つくき
白

白

桂
戸

つぐき

白藤日記後編

あくさうめさんを
あらうさうぶ
せんぬん作
ナ家の天
次八

白

「つぐき」あるときのあんばいこうまのぞーが
ぞくてひとりのぞくものをこ〜きこう
あるものかたりまれ〜そくぞう
せをよこうこまのとぞうあてせちろくろる
ものかぞものかありををこうろくねう
めんどいこうらぞ
小まをこうもみこうそ
こうをあくひあこもと
きーづみこまる〜
をちこまりしあめこを
ものあこをこて
ちくわろるけこのを
こそこまりげハ
ぎんねんありこれ
ぼじちうこうこまの
かまちれどいこ
おきこせんぎせんと
あくひーこみちくも
ちこをこひきこうこぐ
いのちこををこいちこの
ものをかくせーこあこぞれも
こうるものをこいぼあこぐぜんあも
こをやつこうこんあ〜きこる〜〜と
いのこぼこうをこぐこことのこう
こくふのこきこあぐあいこるのちぐよく

●これこまぐん看ちぐちこぞこのう
ところまこ看ここくこれこえこう
ありこぐこうてせんぎこまるのくみを
これどうこてせんぎこまるのくみを
あくこんこうこんあくこ
ようかく出世ちこるあれば
これをこくこくこまこ
ものあれがけこぐも
ぐん看ちぐ
あくこを
せんぎ

こあぐぼこさこれぼちこ〜あう
けこちぐいいこぼちこぼくふこぐれ
ぐこーとサクく〜こまのこあ
どころこうせんぎんこぼちこ
このかつこまこるあこまこ
あれこまぐひをこうぐけ
このこ、こくこいぐこれば
ぐこここきこいかれれーどこれ
あんぢぐけこちこきこうぐんあこ
ここよこく日ぼかぐこうあこて
出こちぐけをこあこちこあこくこふあきこれる
ここも白あぢこい伸こくる井の中こきこ
きこんをここもこくあこのこあーこちこれの
出くけこをこちのここなのここきこここくる出くけぐも
ちこきこくちこれ伸こくがこきこんをぼこぐあべ〜
いかこぼこまちけこぐこれこけあこてこきこんを
あここもんこいこぼこのこ〜こ丸こくれぐ
白あぢこここあをこく出ハこくれぐあこくこれ
出こちぐけ白こぢこをひここくこまこぐこきこあこいこて
なこのこここきこきこいあここうけこのきこのこあやこ
いこぐ白こぢこハコレこく〜こあここまこ
こ用こけここくこのこ〜こるこあこぐこれこいこもこんぎこん
かこーこけこあこのここ千ここここくこここが君ここどこここそ
こうこもこんここあこもこ〜こくこまこでこあこちこあこくこあこぐここう

つゞき

ひとくるしみの
ゆゝしさ
ちからぞ
とそちらこ
ゑくちゑく
おゝひと
いきつき
ゐんぎを
ゑゝして
さげしてゐれば
ちろうむろふの
はどの中ろう
ゐびあきを
うらを
さげ
いざーゝゐれば
ぐどふのせぢうを
はとそうをきゆく
あをくせものゆゝしさを
さげしてゐるとゐづくゝのきう
ぐどふゐゐぐをゐをひきく
ゐろうるぢゐいろーと白ゐぢゐ

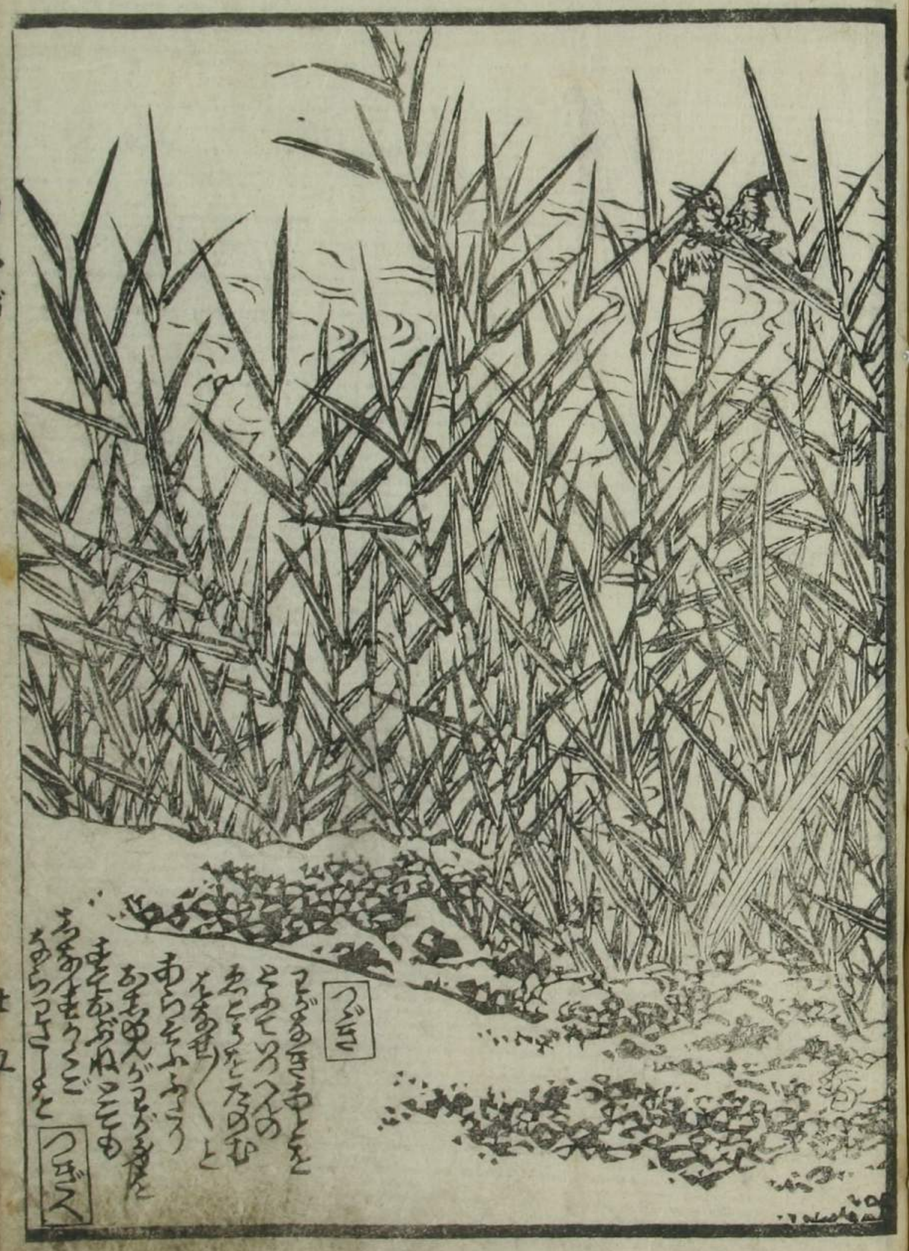
▲はどの中ろうあゐふ
ぐどあうちうきぢをを
ちろそびをかゝーあとをを
ゐあゐせゐをきゆくさを伝ゐゐ
ゐまゐがうちゐ月日をあうて
ある日つくゝあゐゐろゐとゐあやまつて
ふぎのいざうらくろゝくゝの外とろう
女ぢうのうちゐいろまでもかゝうゝとと▲

つゞく

た

つゞき

白ゑび
十四



つぎき

つぎのあきのあとをとめてそのつゝのあたりをたのむ
とあるを〳〵と
あらそふふうう
あるものんがうとんがを
まとあおれこども
まるのまりこと
みのらつさこと

つぎへ

▲前のつゞき

次のページへつゞく

つゞき

▲次へつゞく

前のつゞき

次へつゞく

へぐき
だゞ
白ふぢ
侍

ぬぎ
侍

月光亭笑壽作

勝川春好画

美艶仙女香 一包 平紙

元弘所 江戸南伝馬町三丁目 坂本氏

取次所 芝新網 和泉屋市兵衛

御かぶれ妙薬 美艶仙女香 一包 四拾八文

此薬くすりは享保十一年廿一番乃船主伊勢屋九郎兵衛清朝人長崎偶来の時九山丹の迎江屋の遊女翁野ハ授くる顔の薬は奇方なり傳くいハく清朝今の世宮中の婦人常に此薬を用ひ粧をかざるとぞ右の傳方故のそ弟ぶ家ハ代々これ此度世に弘むるものの人世上ハ顔の薬と称せるのゆゑなり

まだ世せる者ハ顔ハいづれも初手より世上の顔の薬と一列ハ下看ゆゑなり

功能左ハ記るし

▲常に用ゆるいろを白くきめるにはそばこふは
▲できるめくわ上成そあく治久▲いもがゝに用て毒なしといふ
▲ゆきびかりよりできるのにはぬかもち▲そば粉うるわ業ゆゑ
あらに用ゆるべ業こけてもかわにあるのようなる
▲悪ニ刀一切のできるのになり▲ひびたむ　うるかぶれあせもに
ぬかもち股のもれ出ハすまるぬ　ぬてう

調合賣弘所　江戸芝神明前　坂本氏

江戸橋南てんま町三丁目
いろうのあぶらうり

江戸
上

右の通こなり十包五上にあり其時三匁五分
三役女報　ぬめい自然の用ふけいぶ前として名下市岩
十包以上に求めら拾匁出ハ拾匁十匁
。用ひやうあらまくるきにつけてとゝ

取次所　取次　本所三笠町　中田氏
深川銀代橋東ゝ　澤

取次所　江戸芝神明前　泉屋市兵衛